

連載

# 88 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した 私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長  
**橋本 満義** (65歳・内科)

過去の辛く悲しくしんどい出来事も、人間の脳は適度に忘れさせてくれ、甘く懐かしい思い出となる。(人間の感情〈七情〉恐・怒・思・悲・憂・喜・驚)

マンション住まいのご家族(長女)からのご依頼で、実家で独居生活をしている在宅患者のA子さん(81歳、女性、認知症・変形性脊椎・膝関節症)を訪問しました。カンカンカンカンとけたたましく電車が通り過ぎる踏切を渡ったすぐ先のところに、A子さんのご自宅がありました。元大地主だったらしく驚くほどの大邸宅でした。

独居生活ではありましたが、Aさんは屋内をつたい歩きながら、ご丁寧にもお茶とお菓子を出してくださいました。一応、丁寧にお断りしましたが、難聴でもあり、白内障による視力障害もあるため、よく見ると湯のみの底やお菓子には青カビが見られました。Aさんは、まだ元気だからとご家族との同居は拒否されているようで、今回お一人での初診となったのです。

訪問してAさんとお話をしてみると、昔のことはよく記憶されているようですが、最近の短期記憶にはとても問題

がありました。そこで、ご家族との承諾も得ていたので、老人デイケアの楽しさを説明し、明日、送迎バスで迎えに来ますよと伝えると、大変よろこんでいただいたのです。そして一言「私のような年寄りがこれ以上世間さまに迷惑をかけるのは、お国に対して申し訳ない」とおっしゃいました。ふと見ると、お仏壇の上には昭和天皇・皇后陛下のお写真が飾ってあったのです。

次の日、看護師と運転手とともに老人デイケアの送迎バスにて、お迎えに向かいました。しばらくすると、縁側に座るA子さんが見えました。その瞬間、A子さんからも私たちが見えたのでしょう、突然、異常行動をしたのです。押し車を使い外へ出て、敷地内の蔵の裏の方へ姿を消したのです。私と運転手には何が起こったのかわから



ず、全身が強ばりパニック状態になりました。同行の先輩看護師は、まるで予測していたかのように、慣れた手つきでバスから飛び降り、Aさんの後を追いかけてきました。そして蔵の裏へと消えて行ったのです。

数分後、看護師がAさんの手押し車を押しながら、蔵の裏から目の前へと突然現れました。その姿は、まるで寸劇でも見ているかのようで、思わず笑ってしまいました。私が「Aさんは大丈夫？」と聞くと、看護師は「あのままだと、転倒骨折の危険があるので、押し車という移動手段を取り上げたんです。それは介護の常識なんですよ。今は裏のベンチに座ってますよ」と答えました。

このエピソードで私は、介護や看護そして医療が実際に現場で役立つには、たくさんの実践経験からつかむものなのだと、骨身にしみて分かりました。そして、先輩の知恵というものは素晴らしく、尊敬すべきことだと心の底から思ったのです。

その後、Aさんは独居での在宅療養を希望され、訪

問診療を継続することとなりました。私の記憶では、何回か老人デイケアに参加されていましたが、集団行動をあまり望まれなかったようです。しばらくして、ご自宅での転倒骨折により寝たきり状態となり、病院への入院そして施設入所となり、天国へと旅立たれたと知らされました。合掌

在宅医療のかかりつけ医業務は、患者さんの年代とその時々時代の背景による全体を取り巻く環境からも影響を受け、本当に何が正解で何が必要なかは行動してみないとわかりません。今思うに、しっかりとした「志」と「自然界のおきて」そして「現在主義」の結果が全てなのかもしれず、大変な困難を強いられるのです。  
大変ではありますが、今後とも挫折しないで、地方創生・地域包括ケア構築に参加協力したいものです。

「お医者さんが来てくれる」  
24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



**医師数 21名**  
(常勤6名、非常勤15名)  
**内科・外科専門医 18名**  
(国立がんセンター勤務歴有3名)  
**精神科専門医 2名**  
**麻酔科専門医 1名**  
(ペインクリニック科)  
**末期がん治療(緩和ケア) 相談室開設!**

Hyper Blood Viscosity (高血液粘度群)を科学する **臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設**  
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所  
**(医)東西会 千舟町クリニック**

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788  
<http://www.touzaikai.jp/>